

## 柳宗元の愚溪と謝靈運の始寧

下 定 雅 弘

はじめに

柳宗元に對して影響を與えた六朝の詩人といへば、陶淵明と謝靈運がその最たるものである。そして、二人のいずれかといへば、古來、陶淵明の影響を語ることが、謝靈運よりも多い<sup>(1)</sup>。しかし、柳宗元の山水詩（拙文では、自然の紋景を一定の分量で含む詩とし、種樹の詩なども對象とする）に限りその語彙を見ると、謝靈運の詩語を意識することが、陶淵明の詩語を意識するよりもずっと多い。

拙文は、第一に、柳宗元（以下、柳とする）の永州での山水詩を對象として、柳が謝靈運（以下、謝とする）の詩語をどのように意識して用いたのかを調査し、第二に、柳の山水詩が愚溪という一種の園林を得てより後に大きな變化を示していることを明らかにし、第三に、その變化の性質は、謝における始寧と對比して考えることで明瞭となることを述べる。

### 一、謝詩の語を用いる例

柳詩における謝詩の語の使用状況についての資料は、紙幅のつごうにより割愛し、ここにはその結果のみを記す。永州の山水詩に限って、謝詩の語の使用状況をチェックしてみた。柳が特に意識したかどうかではなく、同一の語を認めれば機械的に一例としたのである<sup>(2)</sup>。

調査により、元和四年までの詩に謝詩と同じ語を用いる例が多いことがわかる。用い方を見ると、元和四年までの作、「法華寺石門精室三十韻」

「遊朝陽巖遂登西亭二十韻」「湘口館瀟湘二水所會」「登蒲洲石磯望橫江口潭島深迴斜對香零山」などは、いずれも敍景の語を多數用いている。これに對して、元和五年以後の作、「溪居」「旦携謝山人至愚池」「冉溪」などでは、そもそも謝詩の語を用いることが少なくなっており、かつ用いるにしても心境に關わる語に重點が移っている。

また、謝詩の語の使用狀況とは別に、元和四年までの詩は、長篇の五言古詩が多いのに對して、元和五年以後の詩は、短篇の五言古詩が多い。このように元和四年までの詩と、元和五年以後の詩の間にちがいはあるのは、柳が愚溪を得て、それまで居を構えていた法華寺から、愚溪に移り住んだことがおそらく影響している。

以下、愚溪への移居を境として、元和四年（永州前期）までの詩と、元和五年以後（永州後期）の詩とに分け、謝詩の語の使用狀況と柳詩の内容との關連を考えよう。

## 二、柳詩における謝詩の語の用い方

### 二―一 永州前期の詩

「法華寺石門精室三十韻」を、長篇でしかも謝詩の敍景の語を多用する作ということで、永州前期の作の典型例として擧げる。<sup>(3)</sup>

- |   |       |                        |                      |
|---|-------|------------------------|----------------------|
| 1 | 拘情病幽鬱 | 拘情                     | 幽鬱を病う                |
| 2 | 曠志寄高爽 | 曠志                     | 高爽に寄す                |
| 3 | 願言懷名緇 | 願いて言れ                  | 名緇を懷い <sup>おも</sup>  |
| 4 | 東峰旦夕仰 | 東峰                     | 旦夕に仰ぐ                |
| 5 | 始欣雲雨霽 | 始めて欣ぶ                  | 雲雨の霽るるを <sup>は</sup> |
| 6 | 尤悅草木長 | 尤も悦ぶ                   | 草木の長ずるを              |
| 7 | 道同有愛弟 | 道の同じきもの                | 愛弟有り                 |
| 8 | 披拂恣心賞 | 披拂して心賞を <sup>ほし</sup>  | 恣にす <sup>まま</sup>    |
| 9 | 松溪窈窕入 | 松溪窈窕 <sup>きようしょう</sup> | 窕として入り               |

10	石棧	資縁 <small>いんえん</small> して上る
11	蘿葛	層 <small>そうぼう</small> に綿 <small>つら</small> なり
12	莓苔 <small>ばいたい</small> 侵標榜	標榜を侵す
13	密林互對聳	密林 互 <small>むか</small> いに對 <small>そび</small> い聳 <small>おこそ</small> え
14	絕壁儼雙儼	絕壁 儼 <small>おこそ</small> かにして雙 <small>なら</small> び儼 <small>ほがら</small> かなり
15	壑峭出蒙籠	壑峭 <small>ざんしやう</small> 蒙籠を出だして
16	墟嶮臨澼澹	墟嶮 澼澹 <small>こうよう</small> に臨む
17	稍疑地脈斷	稍疑う地脈の斷つかと
18	悠若天梯往	悠として天梯に往くが若し
19	結構單群崖	結構 群崖 <small>こ</small> を罩め
20	迴環驅萬象	迴環 萬象 <small>か</small> を驅る
21	小劫不逾瞬	小劫 瞬 <small>こ</small> を逾えず
22	大千若在掌	大千 掌に在るが若し
23	體空得化元	空を體して化元を得たり
24	觀有遺細想	有を觀じて細想 <small>わす</small> を遺る
25	喧煩困蟻蠓	喧煩 蟻蠓 <small>べつぼう</small> に困 <small>くる</small> しみ
26	跼蹐疲翹翹	跼蹐 <small>きよくせき</small> 翹翹に疲る
27	寸進諒何營	寸を進みて諒 <small>まこと</small> に何をか營む
28	尋直非所枉	尋を直くして枉 <small>ま</small> ぐる所に非ず
29	探奇極遙矚	奇を探りて遙矚を極め
30	窮妙閱清響	妙を窮めて清響を閱す
31	理會方在今	理會 方に今に在り

- 32 神開庶殊曩 神開かれて庶わくは曩に殊ならんことを  
 33 茲遊苟不嗣 茲の遊 苟くも嗣がずんば  
 34 浩氣竟誰養 浩氣 竟に誰か養わん  
 35 道異誠所希 道異なれども誠に希う所  
 36 名賓匪餘仗 名賓は餘が仗るところに匪ず  
 37 超摠藉外獎 超摠 外の獎けを藉り  
 38 俛默有内朗 俛默して内に朗かなる有り  
 39 鑑爾揖古風 鑑爾として古風を揖す  
 40 終焉乃吾黨 終焉として乃ち吾が黨  
 41 潛軀委轡鎖 軀を潛めて轡鎖を委て  
 42 高步謝塵埃 高步して塵埃を謝せん  
 43 蓄志徒爲勞 志を蓄えて徒らに勞るることを爲し  
 44 追蹤將焉傲 蹤を追いて將に焉くにか倣わんとす  
 45 淹留值頽暮 淹留して頽暮に値う  
 46 眷戀睇遐壤 眷戀 遐壤を睇みみる  
 47 映日雁聯軒 日に映じて雁聯軒  
 48 翻雲波決滌 雲に翻えて波決滌  
 49 殊風紛已萃 殊風 紛として已に萃まり  
 50 鄉路悠且廣 鄉路 悠かにして且つ廣し  
 51 羈木畏漂浮 羈木 漂浮を畏れ  
 52 離旌倦搖蕩 離旌 搖蕩に倦む  
 53 昔人歎違志 昔人 志に違うを歎く

- 54 出處今已兩 出と處と今已に兩つ  
 55 何用期所歸 何を用てか歸る所を期せん  
 56 浮圖有遺像 浮圖 遺像有り  
 57 幽蹊不盈尺 幽蹊 尺に盈たず  
 58 虛室有函丈 虛室 函丈有り  
 59 微言信可傳 微言 信に傳う可し  
 60 申旦稽吾額 申旦 吾が額を稽さん

この詩は、一讀して明らかなように、謝の山水行を範として、心の安寧と清淨を得ようとしている。三一句の「理會方在今」の「理」は、山水の景に「理」を求めた謝の思想であり、三三・三四句の「茲遊苟不嗣、浩氣竟誰養」も、「嗣」というのは謝を意識している。五三句「昔人歎違志」の「昔人」も、謝である。その他の詩人の語を用いた箇所も當然あるけれども、それらは、謝詩ほどの系統性・目的性を持って、意識されていない。

謝詩を意識したかと思われる箇所を、今少し詳しく見よう。

三句「願言」は、『詩經』の「願ニヒいて言に子を思う、中心養養たり」(「邶風・二子乗舟」)・「願ニヒいて言に伯を思い、心に甘んじて首疾す」(「衛風・伯兮」)などに出る語。謝詩では、「過始寧墅」に「且く爲に粉ふん價かを樹うえよ、願言ねがいに孤そむかしむる無かれ」とあり、「入東道路詩」にも「願ニヒいて言に吟謠に寄す」と見える。

八句「心賞」は、まさに謝の語。一三句「密林」は、謝詩「遊南亭」に「密林は餘清を含み、遠峰は半規を隠す」とあり、一四句「絶壁」は、謝詩「登石門最高頂」に「晨に策さくきて絶壁を尋ね、夕べに息いいて山棲いに在り」と、いずれも謝詩中に見える語を用いている。

二四句「觀有」の句は、形こそ同じではないが、「從斤竹澗越嶺溪行」の「此れを觀て物慮わすを遺れ、一たび悟りて違ちがる所を得たり」というのと、ほぼ同じことを言っているだろう。

三七句「外獎」は、「擬魏太子鄴中集詩八首・王粲」の「沮と漳は自ら美なる可きも、客たひの心は外の獎すすむるところに非ず」というのを意識している。ここは、王粲が外からののはたらきかけには動かされなかったという謝詩の文脈を逆さまにして用いている。景の助けを借りなければ、この煩

悶の泥沼から抜け出す（超擲）ことができないという、柳の苦惱の深さを示しているだろう。

四五句「淹留值頽暮」、「淹留」は『離騷』に「時繽紛として變易す、又何ぞ以って淹留す可けんや？」とあるのに始る語。謝の「登臨海嶠初發疆中作與從弟惠連見羊何共和之其二・其三」にも見えるが、謝の語とは限定できない。「值頽暮」は謝の語で、「永初三年七月十六日之郡初發都」に「辛苦しては誰か情を爲さん、遊子は頽暮に値えり」という。老境にさしかかるの意。柳のこの箇所も、夕暮れの訪れと衰老の意とを重ねているだろう。

五二句「搖蕩」は、激しく揺れ動くの意で、司馬相如「上林賦」にも「波と搖蕩して、水渚を奄薄す」と見えるが、ここは心の激しい動搖を言っているものであり、謝詩を意識する。謝の「擬魏太子鄴中集詩八首・徐幹」に「箕漢の情を搖蕩し、年を窮めて憂慄に迫らる」とあり、隱棲への思いが揺れ動き、年中びくびくしていたと、心の不安定・ただならぬさまをいうのを襲っている。

五三句「違志」は、「過始寧墅」に「志に違ふこと昨の如きに似たるも、二紀にして茲の年に及ぶ」と、隱棲の志を長らく實現できなかったことをいうのを用いている。柳はしかし、後の句で「出處今已に兩つ」と、謝の「歎」を受けながら、自分は、「出」と「處」のいずれにも定まりきらないと苦惱を表白している。ここでも、謝を意識しつつも、柳の思は隱棲の方向にはっきりは定まらない。

柳のこの詩は、要するに、官と隱棲の兩極の間で、隱棲に踏み切ることができず、懊惱し、謝の「賞心」とその背後にある「理」、また佛教への傾倒の力を借りて、安らぎを獲得し、清淨心を得ようと、格闘しているものである。この詩は、始めから終わりまで、揺れに揺れている。

この揺れは謝にもあった。しかし、柳においてはもっと本質的で、いかんともしがたいものである。

- |   |       |    |        |
|---|-------|----|--------|
| 1 | 九疑濬傾奔 | 九疑 | 傾奔を濬くし |
| 2 | 臨源委縈迴 | 臨源 | 縈迴を委す  |
| 3 | 會合屬空曠 | 會合 | 空曠に屬し  |
| 4 | 泓澄停風雷 | 泓澄 | 停風雷を停む |
| 5 | 高館軒霞表 | 高館 | 霞表に軒り  |
| 6 | 危樓臨山隈 | 危樓 | 山隈に臨めり |

永州前期の詩をいま一首、「湘口館瀟湘二水所會」について、謝詩の語をどのように用いているのか、検討しよう。

- |    |       |                  |
|----|-------|------------------|
| 7  | 茲辰始激霽 | 茲の辰 始めて激霽        |
| 8  | 纖雲盡褰開 | 纖雲 盡くに褰開す        |
| 9  | 天秋日正中 | 天秋にして日正に申し       |
| 10 | 水碧無塵埃 | 水碧くして塵埃無し        |
| 11 | 杳杳漁父吟 | 杳杳として漁父吟じ        |
| 12 | 叫叫羈鴻哀 | 叫叫として羈鴻哀しむ       |
| 13 | 境勝豈不豫 | 境の勝なる豈 豫ばざらんや    |
| 14 | 慮分固難裁 | 慮分れて固に裁き難し       |
| 15 | 升高欲自舒 | 高きに升りて自ら舒べんと欲するも |
| 16 | 彌使遠念來 | 彌遠き念いをして來たらしむ    |
| 17 | 歸流駛且廣 | 歸流は駛くして且つ廣し      |
| 18 | 汎舟絕沿洄 | 舟を汎かべて沿洄を絶つ      |

詩題の「瀟湘二水の會う所」というのは、永州の北方にある。

五・六句、「高館」が「霞表」、高い空にそびえ、「危樓」、高い樓が、「山隈」に「臨」むというのは、謝詩「登石門最高頂」の「峯を疏りて高き館を抗げ、嶺に對いて迴れる溪に臨む」を意識しつつ、上句はほぼ同じイメージとし、下句を「迴溪」ではなく「山隈」に「臨」むとしたものである。

八句「褰開」は、謝の「登池上楼」に「衾枕節候に味く、褰け開いて暫く窺い臨む。耳を傾けては波瀾を聆き、目を擧げては輻欽を眺む。……池塘春草生じ、園柳鳴禽變ず」と見える。長い病氣の後にカーテンを開けて初春の景を見、心が自然に向かってやさしく開かれていく場面である。柳詩の「褰開」は、謝詩よりも動的だが、解放感という点では共通している。

詩は一〇句まで、舟で遊びにきたこの場に情を投入し、山水の美によって、心の安寧を得ようとしている。しかし一一・一二句を経過し、一三・一四句の二句で、それまでの心の動きは一變する。「慮分」は、惠連と別れて獨り天姥山に登った様子を詠った謝詩「登臨海嶠初發疆中作與從弟惠

連見羊何共和之其三」に、「茲の情已に慮を分つ、況んや乃ち悲端に協<sup>あ</sup>えるをや」、別れの悲しみに思いは亂れる、まして季節は秋の初め、と見える。一五・一六句、高きに上って沈鬱な思いをはらそうとするのだが、長安への思いはいよいよつのる。そうなると、ここにいれば、いっそう心は波立つばかりだから、はやく歸ろうということになる。それが、結句「歸流駛且廣」であり、「汎舟絶沿洄」である。「歸流」は、永州に歸ってゆく瀟水の流れ。「駛且廣」は、はやくて廣い。これは、歸っていく川の流れの速さをいう。一刻も早くこの場を立ち去りたい思いを表すだろう。「汎舟絶沿洄」の「沿洄」は、謝詩の「過始寧墅」に見える。「過始寧墅」では、「山行しては登り頓<sup>くだ</sup>りを窮め、水渉しては洄沿を盡くす」とあって、「沿洄を絶つ」ことは正反對である。謝は、永嘉で、左遷の地ではあっても、とにかく楽しんだ。柳は、謝の語を借りて、謝のように心をはらそうとするのだが、しかし、そうはならないのである。

二二 永州後期の詩

永州後期の典型例として、「旦携謝山人至愚池」を見る。

新沐換輕幘	新たに沐 <sup>けいさく</sup> して輕幘を換う
曉池風露清	曉池 風露清し
自諧塵外意	自ら塵外の意に諧 <sup>かな</sup> う
況與幽人行	況や幽人と行くをや
霞散衆山迴	霞散じて衆山迴かなり
天高數雁鳴	天高くして數雁鳴く
機心付當路	機心 當路に付す
聊適羲皇情	聊か羲皇の情に適う

詩題に見える「愚池」について、簡単に説明しておく。

柳は、永州到着後、龍興寺・法華寺に暮らし、ここを據點にして山水行を重ねていたのだが、元和四年九月二十八日に、湘水を超えて西山に遊



んでいる。そして、その八日後には鉆鉚潭を發見し、まもなくこれを買取っている。その後、翌元和五年秋にはここに移居して、愚溪・愚丘・愚泉・愚溝・愚池・愚堂・愚亭・愚島の八愚を定めるのである。八愚の事は「愚溪詩序」(卷二十四)に見える。

「且携謝山人至愚池」は、この愚溪への移居の翌年に作られた。謝詩の語がどのように用いられているかを確かめよう。

三句「塵外」は、謝詩「從遊京口北固應詔」に「昔聞く汾水の遊び、今見る塵外の鑪くわみ」と見えるが、張衡「思玄賦」に始まる語で、用例は多い。七句「機心」も、「山居賦」に「機心を林池に杜とさす」とあるが、もと『莊子・天地』に出る語で、ともに謝詩を意識していると考える必要はない。

四句「幽人」は、『易・履』に始まる語だが、謝「登永嘉綠嶂山」の「幽人は常に坦歩し、高尚なること邈はくとして匹たぐい難し」を意識しているかも知れない。世俗を脱した高尚な人間である。

六句「天高」も、謝を意識している可能性はある。「初去郡」の「野曠ひろくして沙岸淨く、天高くして秋月明るし」の使い方と同じである。謝詩では、永嘉を去り始寧に歸る時の、はれやかな氣持がこの語に託されているが、柳のこの詩でも、同様のさわやかな心境になっっている。

八句「羲皇情」は、陶淵明「與子儼等疏」の「常に言う五月中、北窓の下に臥し、涼風の暫く至るに遇えば、自ら羲皇上人と謂えり」に基づくもので、暑い夏のさなかに涼しい風にあたることができれば、伏羲のようだというのを、そのまま用いている。

以上、この詩では、謝詩を支える觀念である「理」や佛教への傾倒が、ほとんど何の影響も與えていないことがわかる。共通する詩語はあるが、謝詩を意識すると斷定できるものはない。かりに意識するとしても、心の持ち方に關わる語が主である。

永州前期とは異なり、謝の力を借りずとも、柳は、柳なりに、以前に比べれば落ち着きを得て、安らぎの時間と空間を持つようになったのである。またこのように、詩が短くなったのは、心の揺れがかつてほどひどいものではなくなったことを示している。<sup>(5)</sup>

やはり愚溪での作、「夏初雨後尋愚溪」を見よう。

悠悠雨初霽

悠悠として雨初めて霽はる

獨繞清溪曲

獨り繞る清溪の曲

引杖試荒泉

杖を引きて荒れたる泉を試し

解帶圍新竹

帶を解きて新竹を圍む

沈吟亦何事

沈吟 亦た何事ぞ

寂寞固所欲 寂寞 固より欲する所

幸此息營營 幸いに此に息みて營營

嘯歌靜炎燠 嘯歌して炎燠を靜む

一句「悠悠」は、謝「郡東山望溟海」に「開春初歲に獻み、白日出でて悠悠たり」と同じ語が見える。年の初め春の到來とともに、日がゆったりとのぼることをいっており、柳詩の、雨はれたあとの爽快な気分に通ずる。しかし、よく用いられる語であり、謝詩を意識したとはいえない。

二句「清溪」は、「登臨海嶠初發疆中作與從弟惠連見羊何共之其四」に「攢あまれる念いは別れの心を攻むるも、且に清溪の陰を發す」と、同じ語が見える。これは、『文選』にも見えない語であり、謝を意識した可能性はある。<sup>(6)</sup>

六句「寂寞」は、「郡東山望溟海」に「萱蘇始めより慰むる無し、寂寞こそ終に求む可し」、「齋中讀書」に「矧いんや乃ち山川に歸りて、心と跡と雙つながら寂寞たるをや」と用例が見える。柳の「寂寞」も、謝の「寂寞」も、それを望ましいものとしている點が共通している。謝も柳も『莊子・天道』の「夫れ虚靜恬淡、寂寞無爲は萬物の本なり」を意識して、人氣のないひっそりとした情況を好ましいものと考えているだろう。

謝は、溟海を望むことにより、心の安寧を得ようとした。柳は愚溪に心の安らぎを得ようとしている。五句「沈吟」は、永州前期のはげしい葛藤と懊惱を意識しての語ではなからうか。少なくとも、このひととき、柳の心境は、雨晴れた後の愚溪の靜謐透明に助けられてかなり安定している。それが、この詩の短さにも現われている。<sup>(7)</sup>

### 三、變化の原因—自己の園林の獲得

では、柳詩がこのように、前期の搖れに搖れる心境から、比較的安定した後期の心境への變化を示すのは、なぜだろうか？

それは、結論を言えば、①長安の自宅の園林をこよなく愛していた柳が、②永州で私有地を持ち、③その私有地で造園活動を行い、自ら手鹽にかけた園林を所有するようになったからである。<sup>(8)</sup>

まず、柳が園林をこよなく愛する園林家であるという點について述べる。<sup>(9)</sup>

都の園林について、以下のような記述を見る。文に見えるものを挙げよう。

卷二「夢歸賦」には、「原田蕪穢ぶあひして、崢嶸そうこうたる榛棘あり。喬木摧け解けて、垣廬飾らず」といい、都の自宅の園林が荒れはてしてしまっているだろうと嘆いている。卷三十「寄許京兆孟容書」でも、「城西に數頃の田有り、樹果數百株、多く先人手自から封植せしものなり、今已に荒穢す、恐らくは便ち斬伐せられ、復た愛惜するもの無きを」と、同じく園林の荒廢を悲しんでいる。

詩を見よう。

「酬婁秀才寓居開元寺早秋月夜病中見寄」では、「客に故園の思ひ有り、瀟湘に夜の愁い生ず」と、故園を思つて、さびしさをつのらせている。「過衡山見新花開却寄弟」に、「故國名園久しく別離、今朝楚樹南枝に發く」というのは、都への歸還の喜びを何よりも故園にもどれる喜びとして表現している。「遊朝陽巖遂登西亭二十韻」では、「故墅即ち澧川、數畝均しく肥磽ひたう」と、故園の肥沃豐潤を述べている。「首春逢耕者」では、「故池想うに蕪沒せん、遺畝當に榛荆なるべし」と、文に見た故園の荒廢の悲しみを歌っている。「零陵早春」では、「憑寄す郷に還る夢に、慇懃に故園に入らん」と、春の訪れに觸發されて、故園への思ひを詠っている。「聞黃鸝」では、「一聲夢は斷つ楚江の曲、滿眼に故園春意生ず。……聲を閉じ翅を迴らして歸るに速きを務めよ、西林の紫樅しよくは行當に熟すべし」と、故郷の春を思ひ、故園の桑の實の熟するさまを思い浮かべている。「春懷故園」では、「悠悠たる故池の水、空しく園に灌ぐ人を待つ」と、故園の池水を擬人化して、故園に自分がないことの寂寥を歌っている。<sup>(19)</sup>

愚溪に私有地を得たことについては、次のような記述がある。

卷二十四「愚溪詩序」に、「餘愚を以て罪に觸れ、瀟水の上に謫せらる、是の溪を愛す、入ること二三里、其の尤絶なる者を得て家とす。古に愚公谷有り、今予是の溪に家す、而して名定まる莫し、土の居る者は猶斷斷然たり、以て更ためざる可からざるなり、故に之れを更めて愚溪と爲す。愚溪の上、小丘を買いて愚丘と爲す。愚丘自り東北に行くこと六十步、泉を得たり、又買いて之れに居し愚泉と爲す。……」という。この「其の尤絶なる者を得て家とす」の「得」は、劉禹錫「傷愚溪詩三首」引に「子厚の永州に謫せらるるや、勝地を得て、茆を結び蔬を樹え、沼沚を爲し、臺榭を爲し、目して愚溪と曰う」という「得」と同じであり、「手に入れた」の意だろう。<sup>(20)</sup> 柳は、愚溪を手に入れ、即ち私有地とし、さらに「小丘」と「泉」を買っている。同「序飲」にも、「小丘を買いて、一日は鋤理し、二日は洗滌し、遂に酒を溪石の上に置く」とある。卷二十九「鉅鰾潭記」に、「……其の上に居る者有り、予が亟遊ぶを以って、一旦門を款きて來たり告げて曰く、「官租の私券の委積に勝えず、既に山を芟りて居を更む、願わくは潭上の田を以って、財に資えて以って禍を緩めん」と。予樂しみて其の言の如くにす。則ち其の臺を崇くし、其の檻を延き、其の泉を高きところに行りて之れを潭に墜とすに、聲有りて潏然たり。尤も中秋に月を觀るが與に宜しと爲す、於に以って天の高く、氣の迴かなるを見る」とある。また、同「鉅鰾潭西小丘記」に、「丘の小なること一畝なる能わず、以って籠にして之れを有しつ可し。其の主に問う、曰く

「唐氏の棄地、貨すれども售れず」と。其の價を問う、曰く「止に四百のみ」と。餘憐れみて之れを售う」という。したがって、愚溪・小丘・泉・鈇鋤潭は、みな柳の私有地である。

造園活動については、一連の種樹の詩によっても、草木を移植し、手を入れて、身の回りの植物環境を、身心の健康と安らぎにかなうようにしていることがわかる。たとえば、「種仙靈毗」は、「湘西の原」に在る、足に効くという「靈葉」を庭に移植し、朝夕、丹精込めて面倒を看ることゝを詠じている。また「種朮」は、「爾が澗底の石を違つて、我が庭中の莎を徹てしむ」と、朮を移植し、それが育つて、「晨に歩めば佳色媚たり、夜眠れば幽氣多し」と、身心を癒してくれることを詠じている。

「愚溪詩序」によれば、百歩も歩かぬ範圍に、溪・丘・泉・溝・池・堂・亭・島・花木・山石等等「山水の奇」のなにもかもがあり、柳はこれに満足している。それは、愚溪が、彼の私有地だからこそ、可能となったのである。また、私有地だから、これに自由に手を加え、自己の好みの空間を作ることができた。上に引いたように、鈇鋤潭を中秋の月を見るのによいように改造することにより、「孰か予をして夷に居るを樂しみて故土を忘れしむる者は、茲の潭に非ざらんや？」（「鈇鋤潭記」）という思いを持つのである。「小丘」を買い取り、我が物としたから、「即ち更に器用を取り、穢草を剷げ刈り、惡木を伐り去り、火を烈やして、之れを焚く。嘉木立ちて、美竹露われ、奇石顯わる、其の中由り以て望めば、則ち山の高き、雲の浮かべる、溪の流る、鳥獸の遊邀する、擧げて熙熙然として巧を廻らし技を獻じ、以て茲の丘の下に効す」（「鈇鋤潭西小丘記」）と、自由に手を加えることができ、この地の山水の美しさが、居ながらに樂しめるようになったと満足するのである。

要するに、柳は永州の山水を自己の園林にしたといえる。これにより、長安以來の、園林への愛好を、左遷の地において、かなりの程度満たすことができたのであり、またこの園林が、身心をむしばむ永州の苦境を緩和したのである。その営みは、永州前期にも行われていて、柳の身心に安らぎを與えていた。しかし、元和五年、彼は自己所有の園林を獲得した。愚溪という私有地を獲得し、自分の思いのままに大規模に、丁寧に手を加えることができるようになって、元和五年以後、すなわち永州後期の、柳の心境が、従来よりも安定するようになったのである。

もちろん、柳の心に本當の安寧が訪れたのではない。ただ、龍興寺・法華寺の假住まいを據點として、山野を彷徨していたときに比べるならば、ずっと大きな安らぎを手に入れたのである。

では次に愚溪を得ることにより、相対的な安寧を得るようになった柳を頭に置きつつ、謝詩を見よう。

#### 四、謝と比較しての自己の園林の獲得の意義

謝詩の中でも、最も引用度数の多い「過始寧墅」を見よう。永嘉への赴任の途中、始寧の別墅に立ち寄った時の作である。<sup>(14)</sup>

束髮懷耿介  
束髮してより耿介を抱くも

逐物遂推遷  
物を逐いて遂に推し遷る

違志似如昨  
志に違ふこと昨の如きに似たるも

二紀及茲年  
二紀にして茲の年に及ぶ

緇磷謝清曠  
緇磷して清曠に謝し

疲爾慚貞堅  
疲爾して貞堅に慚ず

拙疾相倚薄  
拙と疾と相い寄り薄り

還得靜者便  
還って靜者の便を得たり

剖竹守滄海  
竹を剖きて滄海に守となり

枉帆過舊山  
帆を枉げて舊山に過ぎる

山行窮登頓  
山行しては登り頓りを窮め

水涉盡洄沿  
水涉りしては洄り沿りを盡くす

巖峭嶺稠疊  
巖は峭しくして嶺は稠疊たり

洲繁渚連綿  
洲は繁りて渚は連綿たり

白雲抱幽石  
白き雲は幽石を抱き

綠篠媚清漣  
綠の篠は清漣に媚ぶ

蒼宇臨迴江  
蒼を蒼いて迴かなる江に臨み

築觀基曾巔

觀を築いて曾き巔に基す

揮手告鄉曲

手を揮りて郷曲に告ぐ

三載期歸旋

三載にして歸旋を期す

且爲樹粉檣

且く爲に粉檣を樹えよ

無令孤願言

願言に孤かしむる無かれと

この詩は、永嘉に左遷されるのだけれども、それを「靜者の便を得た」、長く考えてきた自然と親しむ暮らしを、ようやくできるようになるのだと捉え、この「靜者の便」を得た目で、始寧の自然を描いている。だから、自然がこのように美しいのである。船による「沿沿」、上り下りは、謝にとつては快適なものである。永嘉への左遷が、謝に愛いと憤りをもたらしているのはいうまでもないが、しかし、故郷始寧への歸還のきっかけを作ってくれたと思うことで、憂憤に支配されるのではなく、心の安らぎをも得ることができると言っているのだ。故郷始寧の、わが別墅の自然に接していればこそ、自然は「白雲抱幽石、綠篠媚清漣」の名句を得るほどに、美しく、透きとおっているのだろう。柳は、この「沿沿」の境地を自分のものにしようとしてかなわず、「歸流は駛くして且つ廣し、舟を汎かべて沿沿を絶つ」と、謝の安らぎが不可能であることを自覺していた。

「登永嘉綠嶂山」を見よう。

裹糧杖輕策

糧を裹みて輕き策を杖つき

懷遲上幽室

懷遲して幽室に上る

行源逕轉遠

源に行かんとすれば逕は轉た遠く

距陸情未畢

陸に距るも情未だ畢きず

澹澈結寒姿

澹澈として寒姿を結び

團欒潤霜質

團欒 霜質に潤う

澗委水屢迷

澗は委りて水は屢迷う

林迴巖逾密

林は迴かにして巖は逾密なり

眷西謂初月

西を眷<sup>かきり</sup>みては初月かと謂<sup>おも</sup>い

顧東疑落日

東を顧みては落日かと疑う

踐夕奄昏曙

踐夕 奄ち昏曙

蔽翳皆周悉

蔽翳 皆な周悉

壘上貴不事

壘上は事<sup>つか</sup>えざるを貴び

履二美貞吉

履二は貞吉を美とす

幽人常坦步

幽人は常に坦歩し

高尚邈難匹

高尚なること邈<sup>はく</sup>として匹<sup>たぐ</sup>い難し

頤阿竟何端

頤<sup>い</sup>と阿<sup>あ</sup>と竟に何の端<sup>ちが</sup>いがある

寂寂寄抱一

寂寂として一を抱くに寄せん

恬知既已交

恬<sup>てん</sup>と知<sup>ち</sup>とは既に已に交われり（諸本「恬如」に作る。森野の校訂に従う）

繕性自此出

性<sup>やしな</sup>を繕うこと此れ自り出でん

永嘉に到着後しばらくして、この山に登ったのだろう。「懷遲」、早く着きたいと心はやらせ、「情未盡」、「踐夕奄昏曙」、山中を歩けばすぐに夕暮れになり、また明るくなったと、時を忘れて山水に没頭する様子が表現されている。永嘉の山水詩の中でも、山水によって癒されている度合の最も高いほうに属するだろう。「蔽翳皆周悉」、かくされた奥まで全部見つかったという表現にも、この時の謝の充實を知ることができる。そして、この充實感と對應して、「幽人常坦歩、高尚邈難匹」と、自己評價も極めて高い。山水を跋涉することで、心の平安を得ようとする行爲は、柳の永州前期に類似するが、柳詩において、これほどまでに山水を愉しむことはないし、またこのように高い自己評價をすることも決してない。謝と柳の本質的なちがいを考えさせる詩である。

「晚出西射堂」を見よう。

歩出西城門

歩みて西城の門を出で

遙望城西岑

遙かに望む城西の岑みね

連障疊巘嶠

連障は巘けんがくを疊み

青翠杏深沈

青翠は杏として深沈たり

曉霜楓葉丹

曉の霜に楓の葉は丹く

夕曛嵐氣陰

夕ゆうの曛かげりに嵐の氣は陰くらし

節往感不淺

節往きて感うれいは淺からず

感來念已深

感來たりて念いは已に深し

羈雌戀舊侶

羈たひの雌は舊つれき侶を戀い

迷鳥懷故林

迷える鳥は故の林を懷う

含情尙勞愛

情を含んで尙お勞愛す

如何離賞心

如何ぞ賞心を離れんや

撫鏡華緇鬢

鏡を撫れば緇くろき鬢は華しろく

攬帶緩促衿

帶を攬とれば促しまれる衿も緩し

安排徒空言

排に安んずとは徒らに空言のみ

幽獨賴鳴琴

幽獨 鳴琴に頼らん

永嘉に着任した年の晩秋に作られた。この詩は憂愁が深い。描かれる景も、憂愁に染まり暗い。注意していただきたい。結句に「安排徒空言、幽獨賴鳴琴」という。「安排」は、『莊子・大宗師』に「排に安んじて化を去れば、乃ち寥たる天一に入る」とあるのに基づく。推移に安んじて生きていけば、自然と一つになることができるの意。しかし、永嘉は、ついに謝をそのような精神に安定させることはなかった。ところが、後に見るが、始寧での作「登石門最高頂」には、「順に處りて故に排に安んず」と言う。左遷の地永嘉と、故郷のしかも己が所有する別墅の始寧とのちがいをみごとに表している句だといえる。

次に始寧での作、「石壁精舍還湖中作」を見よう。



昏旦變氣候

昏旦に氣候は變じ

山水含清暉

山水は清暉を含む

清暉能娛人

清暉 能く人を娛<sup>たの</sup>しましめ

遊子憺忘歸

遊子は憺<sup>たん</sup>として歸るを忘る

出谷日尙早

谷を出でしとき日は尙早きに

入舟陽已微

舟に入るとき陽は已に微かなり

林壑斂暝色

林<sup>りん</sup>壑<sup>がく</sup>は暝色を斂<sup>おさ</sup>め

雲霞收夕霏

雲霞は夕霏<sup>せきひ</sup>を收む

芰荷迭映蔚

芰荷<sup>きか</sup> 迭<sup>たが</sup>いに映蔚<sup>えいうつ</sup>し

蒲稗相因依

蒲稗<sup>ほひ</sup> 相<sup>あ</sup>い因依す

披拂趨南逕

披拂して南逕に趨り

愉悅偃東扉

愉悅して東扉<sup>ふ</sup>に偃す

慮澹物自輕

慮<sup>た</sup>澹りて物は自ら輕し

意愜理無違

意<sup>かな</sup>愜いて理は違<sup>ちが</sup>う無し

寄言攝生客

言を寄す攝生の客に

試用此道推

試みに此の道を用<sup>もち</sup>って推せと

始寧第一期の作。石壁精舍は、靈運が始寧に歸ってから建てた寺。そこから湖中をわたって歸るときの情景描寫が中心に配置されている。この詩の敍景は「清暉能娛人」というように、明るさとやわらぎに充ちている。夕暮れの情景も、その光はやさしく沈んでいき、ひし・はすと、がま・ひえがよりそってしげる様子も、謝の心の和やかさを反映している。そして、この詩では、自分の「理」の哲學に絶大なる自信を持っている。柳の永州後期の作に、安寧を詠う詩があるとしても、この詩とは比較のしようがないだろう。

「登石門最高頂」を見よう。

晨策尋絕壁  
 晨に策きて絶壁を尋ね  
 夕息在山樓  
 夕に息いて山樓に在り  
 疏峯抗高館  
 峯を疏りて高き館を抗げ  
 對嶺臨迴溪  
 嶺に對いて迴れる溪に臨む  
 長林羅戸穴  
 長き林は戸穴に羅なり  
 積石擁基階  
 積なれる石は基階を擁す  
 連巖覺路塞  
 連なれる巖は路の塞がれるかと覺わせ  
 密竹使徑迷  
 密なる竹は徑をして迷わしむ  
 來人忘新術  
 來たる人は新しき術を忘れ  
 去子惑故蹊  
 去る子は故の蹊に惑えり  
 活活夕流駛  
 活活として夕の流れは駛く  
 噉噉夜猿啼  
 噉噉として夜の猿は啼く  
 沈冥豈別理  
 沈冥なるも豈理を別にせんや  
 守道自不攜  
 道を守りて自ら攜れず  
 心契九秋幹  
 心は九秋の幹に契り  
 目玩三春美  
 目は三春の美を玩しむ  
 居常以待終  
 常に居りて以て終わりを待ち  
 處順故安排  
 順に處りて故に排に安んず  
 惜無同懷客  
 惜しむらくは懷を同じくする客の  
 共登青雲梯  
 共に青雲の梯に登る無きを

始寧第二期の作。この石門には、謝の南の住居があった。この詩もまた、始寧がどれほど、謝に大きなやすらぎと自信を與えているかを教えて

くれる。この安らぎと自信は、ここでは、自分が建てた家にあることと関係しているだろう。「青雲の梯」は、石門最高頂であるとともに、靈運が達していると自負する境涯でもあるだろう。

以上、ごく簡単に謝詩を見た。謝が、劉宋朝の下で、ついに官職についての望みを果たすことができず、終始、憂憤を抱いていたことは、多くの學者が指摘してきた。どれほど、山水の美しさを歌おうとも、また「理」と一體となった自己を語ろうとも、謝が、自己の誇った境地に落ち着かなかったことは明らかである。だがしかし、これを柳との比較という場に置いてみると、謝の安寧と自信は、柳よりはずっと深い。謝がこのような安寧と自信を持ち、それを詩に表現し得たのは、私の以上の観察によれば、始寧があつたからである。自己の所有する廣大な別墅があり、それを自己の園林として愛おしむことができたからである。

佐藤正光『南朝の門閥貴族と文學』（汲古書院、九七・二）は、別墅始寧における謝を論じて、佛教への傾倒、理の追究などの「内面的な眞理追究の純粹さ」と、「父祖から繼いだ遺産には舊居、莊園の他に多數の従僕、緣故の従者、門生らがあり、その勞働力を使い開墾を行」うという「外面的な貴族意識」とが、同居していたとする。私は、始寧の詩の特徴である「隱棲者らしい心の安らぎ」「哀愁とのコントラストをもたず、落ちついた心との調和の形で歌われる傾向」（高木正一「謝靈運の詩風についての一考察」、『立命館文學』一八〇、六〇）の基礎に、始寧が大貴族謝靈運の自己所有の別墅であるという事が決定的な役割りを果たしていると見るのである。

この謝のありようから柳を見ると、柳が愚溪を得て、それまでに比べれば、落ち着きと安らぎを示すようになることもよくわかる。柳の愚溪は、謝の始寧である。柳は愚溪を得ることで、すなわち、自己の所有する園林を得ることで、龍興寺・法華寺に寄寓している時に比較すれば、落ち着きと安寧を得ることができるようになったのである。柳宗元というと、山水記山水詩と見るのが一般である。しかし、柳は、山水の園林化を行つたのであり、しかも自己所有の園林を山水の中に實現したのである。

これは、謝の始寧と柳の愚溪との共通點である。だが、もちろんちがいがあつた。柳の愚溪は、謝の始寧に比べれば、規模があまりにも小さい。それは、所詮、左遷の地での「樂園」である。池や、島や、泉や、堂や、亭に「愚」と名づけることは、それが全て自分のものだとしてレツテルを貼ることだが、しかし、「愚」とは、「餘愚を以て罪に觸れ、瀟水の上に謫せらる」（『愚溪詩序』）というように、處世の誤りにより、永州に流謫された己の愚かさを意味している。すると、この自己所有の園林は、長安を見つめる場でもあるのであり、それが安住の場でないことを、命名自體が示しているといえる。

## 五、皇權との距離が、景の色合いを決定する

以上をまとめるとこうなる。一、謝が始寧という自己所有の園林の造営により心の平安を得たように、柳も愚溪を得て、從來と比較すれば、より多くのやすらぎを得た。二、しかし、謝の始寧に比べれば、愚溪が柳に與えた安寧の度合は低く、景もまた、悲哀と苦澁の色をより多くにじませる。

この安寧の度合の差は、どこから生ずるのか？ 私は、その最も根本的な原因は、兩者が皇權に歸屬している度合にあると考える。

この觀點を與えてくれたのは、王毅『園林與中國文化』（上海人民出版社、九〇・五）である。王毅は、こういう。

隋唐以後、皇權の士人への強大な支配が實現した。「隋唐以後、中國封建政治體制が成熟していった基本的な指標の一つは、皇權と士大夫階層間の不安定な關係を終らせたことであり、皇權が自覺的に各種の方法を運用する能力を持ったことである。特に九品中正制を廢止し、科擧制を實施することを通して、魏晉以來の士族豪強の政府の官吏選拔に對する影響力をたちきったことで、ほんとうに集權制度の士人階層に對するコントロールを實現できるようになったのである」（一八八頁）

この皇權の獨裁化の傾向に對して、封建社會を連續させていくために、士人の調整能力が必要だった。「皇權は一面では、皇帝の自己利益の追求だけではなく、社會全體の利益とその調整のための役割りを果たさなければならぬ。しかし、それは皇權の獨裁化の必然と相矛盾する。……だから、皇權の專制と統治階級全體の利益の間の矛盾と平衡は、中國封建社會形態が連續するための基本的な條件である。中國の封建統治階級の中では士大夫階層だけが、皇權と社會經濟・政治體制の全體と、深く、廣い關係を保っていたのであり、同時にこの兩者を代表する身分を兼ねそなえてそれらの關係を調節することができたのである」（一八九頁）

この調整を行うために、士大夫層は、皇權から相對的に獨立した意志・人格・審美感などを持つことが必要だった。「要するに、中國封建社會の形態の基本的な特徴が、その集權制度と士大夫階層間の關係において必ず二つが相互に平衡をたもち、相互に依存する矛盾した面をそなえることを決定した。前者の後者に對する絶對的制約と後者の相對的に獨立した意志・道德・人格・情感・審美感等々がそれである」（一九二頁）

士人の隱逸文化、その代表的なものとしての園林は、この調整の必要を基礎として發展した。「士人階層の相對的獨立は社會機構の客觀的必然的要求であつたが、しかし集權制度の性質は直接にまた積極的な方式によってはそれを實現することに限界があることを決定づけた。これが士大夫

階層に高度に發達した間接的・消極的方式を求め創造するようにせまり、これにより自己の相對的獨立を社會機構が必要な程度にまで保證しようとしたのであり、この方式が隱逸文化なのである。……そして、中國古代士大夫の隱逸文化・園林が、一幅の山水畫や一首の田園山水詩にいたるまで、自己獨特の豊富な意味合いを持っている、その原因はここにある」(一九四頁)

以上を、一言でいえば、皇權への歸屬の強まりとともに、士人における皇權からの相對的獨立・隱逸文化への希求もまた強まったのだと、いえる。<sup>(15)</sup>

王毅のこの論を、唐の士人に焦點を當て、園林に即して、簡潔にいえばこうなるだろう。六朝期の「小隱」は、莊園を經營して、その山林を跋涉したが、唐代の「大隱」は、「壺中天地」といふべき小さな園林の中に山水の美を結集した。<sup>(16)</sup> この變化は、皇權の強大化と士人の皇權への歸屬性の強まり、そして、強大な皇權からの士人の相對的獨立の必要に基づく隱逸文化の發展を背景としている。

この觀點から、謝の始寧と柳の愚溪を見よう。

一言でいえば、大貴族である謝は、皇權への歸屬性が柳に比べれば弱く、自己所有の別墅に、一時ではあっても、隱逸・安住の地を求めることができた。柳もまた、皇權から相對的に獨立した隱逸・安住の地として愚溪を求めたのだが、皇權への歸屬性があまりにも強いために、愚溪は、安住の度合を低めるのである。

これをいまだ少し詳しく述べよう。謝の場合、劉宋朝との確執・摩擦があつて、これへの反動が、我が物、始寧への愛着を深めた。この感情が、始寧の自然をこよなく美しくし、時として、手放しの贊美・陶醉の世界として、始寧を表現することを可能にしたのである。隱棲というも、それは、實は、自己の所有する土地への回歸に他ならない。始寧は、皇權とは相對的に獨立して、充分に自らを樂しませ、慰安する場だったのである。謝にとって、始寧は高い自足性を持っていたのである。そして、これら一切の感情と表現の背後にあるのは、廣大な莊園を私有する大貴族であるという謝の identity に他ならない。ただし、大貴族謝靈運が、二度目に始寧にもどつて以後、皇權から離脱して、隱逸生活を享受し、放縱を貫こうとする姿勢を強めた時、皇權はついに牙をむいてそれを許さず、謝の生涯は悲劇として閉じられた。彼の悲劇は、「王制の下では、士人の相對的獨立は必ず集權制度の許可のもと・必要な限度の中に置かれていなければならない、さもなくばその存在は不可能である」(王毅前掲書、二〇六頁)ことをはっきり示している。謝は、朝隱(官人として朝市に在りながら、隱逸の時間と空間を確保する)の思想が確立する直前の、皇權に對する最後の抵抗者だったといえるだろう。皇權と士人との關係史における謝の位置は、そのようなものであることを確認した上で、始寧と始寧での生活が、謝に大きな安らぎを與えるものであったことを強調しておきたい。

これに對し、柳の場合、愚溪は、どれほど満足と慰安をもたらすものであつても、それは、愚溪であるしかなかったのである。苦い味を伴うも

のであるしかなかったのである。この感情の背景にあるのは、身は永州に在っても、心は長安に生きつづけた精神、すなわち皇權に餘りにも深くとりこまれてしまった朝臣としての柳の identity である。

だから、山水詩や園林を詠じた詩の景は、景そのものによるのではなく、士人としての皇權への歸屬性の度合・相對的獨立の程度によって、その意義と色合いを變えるのである。

最後に一言。目をずらせて、柳の愚溪を中唐という士人の精神の大きな轉換期の中に置いてみると、それはまた別のことを語ってくれる。愚溪は、皇權から相對的に距離を置いて、自己の時間と空間を持つとうとする強い意欲が、柳に存在したことを示している。それは、白居易が鮮明に示す「獨善」の思想のさがけだと見ることが出来る。白居易は、「獨善」を「兼濟」と並ぶ觀念として打ち立てた。それは、皇權の強大化が進むほどに、皇權からの相對的獨立を求め、その世界を成熟させていった、中國の知識人の精神史・生活史における歴史的宣言といえる。<sup>(17)</sup>元和期にその生を閉じてしまった士人として、柳宗元は、ひたすらに唐王朝の朝臣としての生きがいを求めて生きたかのように見える。だがしかし、柳宗元もまた、白居易と同じ時代の官僚であり、詩人であり、白居易が行った宣言に向って同質の営みを行っていたのである。愚溪が示す山水の園林化は、白居易の「壺中天地」を生み出す胎動といつてよい。それが、苦澁と悲哀を色濃くにじませているのは、やはり、皇權の凝集力が頂點に達していた元和という時代のスタンプであるのだが。

# 注

(1) 古典文學研究資料彙編『柳宗元卷』(吳文治編、中華書局、六四・一〇)によって調べた概數は、陶淵明の影響を述べるもの二十數例、謝靈運の影響を述べるものほぼ十例、兩者の影響を述べるものほぼ十例である。

(2) 語のチェックには、興膳宏編『謝靈運詩索引』(京都大學中國文學會、八一・三)を用いた。編年は、王國安『柳宗元詩箋釋』(上海古籍出版社、九三・九)に依る。王國安が元和何年と指定するものに限る。↓の下に示す數字が、柳詩の中で謝詩(「山居賦」を含む)に見えている語の數である。

〈元年〉「法華寺石門精室三十韻」(六〇句)↓一二、「構法華寺西亭」(二八句)↓六。

〈三年〉「遊南亭夜還敍志七十韻」(二三八句)↓三一、「法華寺西亭夜飲」(六句)↓一、「荊簾下始栽竹」(三〇句)↓七、「自衡陽移桂十餘本植零陵所住精舍」(一八句)↓一、「湘岸移木芙蓉植龍興精舍」(八句)↓二、「巽公院五詠之四 芙蓉亭」(二〇句)↓四、「巽公院五詠之五 苦竹橋」(二〇句)↓六。

〈四年〉「遊朝陽巖遂登西亭二十韻」(四〇句)↓九、「湘口館瀟湘二水所會」(二八句)↓九、「登蒲洲石磯望橫江口潭島深迴斜對香零山」(二二句)↓六、「遊石角過小嶺至長島村」(二八句)↓九、「種仙靈毗」(三四句)↓三、「植靈壽木」(二六句)↓一。

〈四年〜五年〉「種朮」(二四句)↓三。

〔五年〕「冉溪」(八句) ↓一、「溪居」(八句) ↓一。

〔六年〕「且携謝山人至愚池」(八句) ↓五、「夏初雨後尋愚溪」(八句) ↓三、「雨後曉行獨至愚溪北池」(六句) ↓一、「雨晴至江渡」(七絕) ↓一。

〔七年〕「與崔策登西山」(二十四句) ↓六。

〔八年〕「入黃溪聞猿」(五絕) ↓三。

(3) 以下、柳の詩文のテキストは、『柳宗元集』(中華書局、七九・一〇)を用いる。

(4) 小尾郊一『中國文學に現われた自然と自然觀』(岩波書店、六二初版)第二章第六節、同「謝靈運の山水詩」(『日本中國學會報』二〇、六八・一〇)、工藤陸子「賞」字考―文獻に見る「賞」字の基本概念をめぐって―(二松學舎大學「人文論叢」五五、九五・一〇)を参照。

(5) 詩體及び詩の長短と、心情との關係については、拙稿「柳宗元詩における詩體の問題―元和一〇年を境とする古體から近體への變化について―」(『日本中國學會報』三六、八四・一〇)を参照されたい。

(6) 『全唐詩』(商務印書館國際有限公司、CD-ROM版)を検索した所、唐詩では、李白の十例を筆頭に、孟郊六例、杜甫五例、戴叔倫四例その他の少なくない用例を見る。したがって、この話も、謝を意識したとはいきれない。

(7) 「與崔策登西山」は、二四句の五古で、永州後期の作の中では異例に長い。この詩は、義兄崔簡の弟崔策が永州に尋ねてきてくれたおり、ともに西山に登った時の作だが、柳の心は亂れ、悲しみに襲われている。崔策は、「送崔子符罷學詩序」(卷二十三)によれば、「有司に進み、六たび選ばれるも獲ず」と進士の試験に落ちつづけて、終に受験をやめることを決意している。この不遇の外弟の來訪が、「故に始め進め見るも卒に以て廢す」(同上)という己の境遇と響き合っており、この詩の感情を起伏に満ちたものとし、長篇となっているのである。

(8) 戸崎哲彦「終に永州の民と爲るに甘んず」―「西山」發見と「愚溪」移居の裏にあるもの―(『東方學』八六、九三・七)は、愚溪への移居の理由を、中央政界の情勢の變化によって、量移と大赦への期待が膨らんでいたのが、それが實現しないため、絶望感に轉じたことによるものだとしている。移居の動機が何であつたにせよ、愚溪に移ることによって、柳はそれまでに比べれば、より多くの心の安寧を得たのである。

(9) 柳の長安での園林經營については、戸崎哲彦「柳宗元の莊園經營」(『彥根論叢』二九八、九五・一一)に詳しい。

(10) 故園への思いは、長安への思いと同じではない。柳は、永州においては長安への思いを詠うことを抑制していた。長安は政治の場であり、長安への思いは、失脚の煩悶を誘發して彼の心を苦しめる。だから、長安への思いは抑制されたのである。しかし、故園は、そもそも長安に在る時からして、政治から離れた安らぎの場であり、柳を癒す場であつた。だから、永州において、故園への思いは抑制されることなく詠われたのである。この點については、拙稿「柳宗元永州望郷詩」(『野草』二七、八一・四)をご覧いただければ幸いである。

(11) 『劉禹錫集』(中華書局、九〇・三)卷三〇。なお、「得」の意義については、小池一郎氏から貴重な意見をいただいた。

(12) 永和里佳子「白居易詩に見られる私有意識」(廣島中國學會「中國學研究論集」三、九九・四)は、私有物としての洛陽履道里的邸宅が、白居易の心に與えた安らぎを分析している。「私有」が、精神と創作に與える影響を考察したものとして、先驅的な論文である。

(13) 私は、北京大學に在外研修中の一九九七年二月、永州に行き、愚溪があつた地を實見した。その時、永州八記などを讀んで感じていたよりもずっと狭く、大きな庭園のような印象を持った。柳の山水詩を、山水の絛景というだけでなく、園林の描寫という視點からも見る事ができるのではと感じたのである。なお、

この時の調査結果については、拙文「柳宗元永州八愚の位置について―永州の民間學者張緒伯氏の説を紹介する―」（『中國文化論叢』六、九七・四）をご覧ただければ幸いである。

- (14) 謝詩の訓讀は、花房英樹『文選』三（集英社、全釋漢文大系二八、七四・一〇）・同四（同二九、七四・一二）および森野繁夫『謝康樂詩集』上下（九三・九、白帝社）を参照した。

- (15) 謝思煒『白居易集綜論』（中國社會科學出版社、九七・八）は、白居易の「獨善」の定立について、次のようにいう。「彼の政治批判は、後、繼續するすべはなくなったものの、しかし忠を盡くし職を盡くすことは一貫して彼が官であることの基本原則だった。こうした政治的選択をする時、中唐士人たちは當然一つの問題に直面した。即ちどのように個人と國家の關係を調和させるか？どのように自己個人の價値を見るか？……兼濟・獨善の區別の彼にとっての意義は、主には、彼の個人生活と政治生活の間のバランスを保持することであり、兩者が主體個人に均しく意義があることを肯定している」（三二〇頁〜三二三頁）。これは、王毅が、社會體制の側から見ていた問題を、士人個人の側から見ての論といえるだろう。中國の學界では、この觀點はかなり普遍的なものである。

- (16) 「壺中天地」については、赤井益久「白詩風景小考―「竹窓」と「小池」を中心として―」（『國學院雜誌』九七―一、九六・二）が、王毅の論を援用しつつ、わかりやすく説明している。

- (17) 白居易の「獨善」の意義については、拙著『白氏文集を讀む』（勉誠社、九六・一〇）をご覧いただければ幸いである。

# 追記

拙文は、二〇〇一年七月一四日、青山學院大學で開かれた、六朝學術學會の研究例會において發表させていただいた時の草稿を、補正して成ったものである。當日、貴重なご意見のご指導を賜った、諸先生、諸兄姉に深く感謝する。また、査讀に基づいての編集委員會からの懇切なご指導に深謝する。